

乳児の自立座位を促す保育内容の検討

カルマール良子（美作大学短期大学部） 三須朋子・神原里奈（幼保連携型認定こども園 常石すくすくハウス）

【研究の背景】

- 発達とは、子どもが能動性を発揮し、環境と関わり合う中で生活に必要な能力や態度を獲得する過程（内閣府 2017）。
- 座位は「受動的」な姿勢援助と「能動的」な運動の両方を含む。
- 乳児の能動性に基づいた座位獲得の過程を促す保育内容の検討が必要である。

自立座位の定義

乳児が匍匐姿勢から能動的に自力で安定した座位姿勢になること。

【研究の目的】

乳児が自立座位を獲得するための保育者の援助や配慮、日常生活や遊びについて検討する。

【研究の方法】

- 床面での匍匐遊びを促す環境を工夫し、受動的な座位姿勢補助や育児用品の使用を控えた。
- 「担当制」の保育をとる0歳児クラスの保育者が、カメラ、ビデオカメラを記録用に録画しつつ、ノートに記録した。

倫理的配慮: 保護者には事前に調査の趣旨や内容について説明し、写真や記録内容については随時確認し、同意を得た。



受動的な座位姿勢保持や育児用品の使用を控え、床面での自発的な遊びを見守り、個人差に応じて保育環境や関わり方を工夫した。



安定した独立歩行を獲得するまでの間、担当保育者が乳児を抱いて1対1で離乳食を援助した。

入園直後は、受動的な座位姿勢や抱っこ姿勢を好む事例もあったが、保育者と子どもとの信頼関係を築くこと、一人ひとりが安心する姿勢、遊びを理解し、少しずつ床面での生活が慣れるよう援助しながら、能動的な動きを見守った。

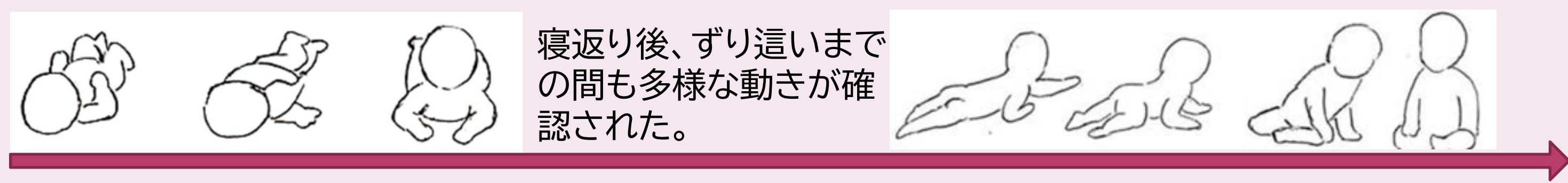
【結果と考察】

表1 主要な運動発達段階への到達月齢

（数値は月齢）

	寝返り	ずり這い	四つ這い 姿勢保持	自立座位	四つ這い 前進	つかまり立ち	伝い歩き	独立歩行
A児	4	6	6	7	8	7	7	12
B児	5	6	8	8	9	9	10	13
C児	5	7	9	8	9	10	11	13
D児	3	9	11	11	14	13	14	観察中

発達理解と保育内容の工夫により、対象児は、共通した粗大運動発達過程【寝返り・ずり這い移動を経て自立座位と四つ這い】であった。



継続的に変化する発達過程において、重力に抗する力が備わり新しい運動パターンを構築しながら、座位姿勢へ移行した。



自立座位を待ったことで、「ねがえり」「はいはい」「おすわり」の主な指標の間には、バリエーション豊かな姿勢や動き、全身をつかった遊びを確認できた。

➡日常生活において、保育者と保護者が共に、「～ができる、まだできない」ではなく、発達過程を見通すことができる具体的な指標を検討する必要がある。



研究実施前: 「おすわりの練習」をしていた時は、身体重心が不安定で、座位から自分で匍匐移動ができない事例があった。

研究実施後: 自立座位の場合、身体重心が安定し、バランスを崩すことなく、座位から自分で匍匐移動ができた。

引用文献

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館
Pikler, E. (1968) Some contributions to the study of the gross motor development of children, J Genet Psychol, 113, 27-39
Pikler, E. (1972) Data on gross motor development of the infant, Early Child Dev Care, 1, 297-310
厚生労働省（2017）『保育所保育指針』フレーベル館
子ども家庭庁（2024）『母子健康手帳』
<https://www.cfa.go.jp/policies/boshihoken/techou/>
（最終閲覧：2024/07/07）

「寝返り」と「ひとりすわり」が同月齢時に記載されている育児書などの影響より、「おすわりの練習」をする保護者の存在が確認された。

➡乳児の自発性に基づく運動発達過程を捉える必要がある。

【結論と今後の展望】

- 乳児が自発的に全身を動かそうとする意欲を尊重し、自由に動ける床面での遊びと環境を工夫した結果、自立的な座位と四つ這い移動運動を獲得した。
- 乳児期初期の自発的な運動発達過程を踏まえた0歳児保育内容は、「はいはいをしない」「はうことよりおすわりを好む」「発達の飛び越し」などの保育課題解決のヒントとなり得る。今後も、自立座位獲得の意義を包括的に検討する。